

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部 会 名	中学校 特別支援教育部会

研究主題

個々の子どもの困難さに応じた内容や指導方法の工夫

テーマ

『全体指導と個別指導のバランス』

提案概要

1 生徒の実態と育成したい資質・能力

情緒障がい学級に所属する生徒が多く、自分の気持ちを言語化することに困難を抱え衝動的な行動を起こしてしまったり、また周囲の刺激に影響を受けて気持ちが動揺したりしやすい。そのため、①自分の気持ちを適切な言葉で相手に伝えることができる力②相手の気持ちを落ち着いて受け止める力③自信をもって学校生活を送り、失敗を恐れずに挑戦しようとする力を育むことを目標とした。

2 実践の内容

全体指導と個別指導（英語・数学）の2種類の指導形式で実践。

- （1）全体指導：体験的な活動を多く取り入れ、教科担当教員が主導する教科授業を中心に、チームティーチング体制で行った。
- （2）個別指導：生徒の特性に応じて3つのグループに分け、それぞれのグループに合う目標・活動（書字活動の有無や活動の難易度などを調整）を展開して指導した。

3 成果と課題

（1）成果

- ・個別指導でゲーム的な活動を中心にしたことで、英語、数学への心理的ハードルが緩和された。
- ・教科そのものの楽しさを感じることができ、意欲向上につながった。
- ・全体指導で学んだことを個別指導で深めたい、という意欲が見られるようになった。
- ・小グループで学習や生徒同士のやり取りにおける成功体験を積み重ねたことが全体指導での意欲につながった。

（2）課題

交流級など大きな集団へ入ることへの不安感、コミュニケーション力不足は依然としてある。今後も小グループでの成功体験を積み重ね、自己肯定感を高めていく必要がある。

質疑応答

質疑：提示された時間割は、学年・特別支援学級・個別の時間割のいずれか。

応答：特別支援学級の時間割である。教科担任が付くことで、交流級や大人数の授業ではできない実践ができる利点がある。

質疑：特別支援学級生徒の中学卒業後の進路について教えてほしい。

応答：全日普通科・サポート校など進路は多様。総合の時間や昼休みの時間を活用して進路指導を行っている。変化に対応するのが苦手な特性をもつ生徒が多いため、2年生のうちから保護者を交えた面談の機会をもつようにしている。

協議の柱及び協議概要

1 協議の柱 「インクルーシブな学校の実現に向けて、特別支援教育ができること」

2 協議概要

はじめに、以下の4つのテーマについて、各自が付箋に意見をまとめ、グループ内で共有した。

その後ワールドカフェ形式によるグループ間の共有を行い、最後に元のグループに戻って全体共有を行った。

各テーマについて、協議の中で出された意見は以下のとおりである。

(1) 学校で行なっている個別支援について

交流授業や行事への参加の促し、苦手な教科や気持ちの伝え方の学習、支援担当やSC、日本語指導教員による取り出し指導、支援級のための行事、国語と数学は個別支援（その他は全体or多人数での学習の為個々に向けた支援ができていないという課題がある）、一日の見通しを立てる練習等

(2) 教材の工夫について

視覚的支援（大型モニター・パーソナルカラー・写真や動画の活用）、ゲームなど興味をもっていることやものを活用する、地域や小学校に届けるカレンダー作り、個に応じた課題、すぐにできそうな課題と少し難しい課題を織り交ぜる、トレーニング等

(3) 支援につなげていくための環境づくりについて

授業のユニバーサルデザイン化、保護者との連絡を密にとる、交流級で過ごす時間を増やす、教員同士の理解、支援員さんとの連携、学校探検時に支援学級のことを「困っている子が困らないように練習するお部屋」と説明、授業や活動内容によって教室を分ける、「かけはしルーム」（学校と家庭、教室と本人、先生と本人等とのかけはし）を設置している等

(4) 様々な「つなぐ」ための支援策について

特別支援学級担任が「みんなの先生」として交流級に入る、支援会議、特別支援学級担任によるインクルーシブな授業、通常学級からの逆交流、連絡帳を交流級担任とのやり取りに活用する、コーディネーターが各クラスを周り児童の困り感の情報収集を行う、教員への情報発信等

まとめ概要

特別支援学級在籍生徒数が増加・多様化傾向にある現在、個々の子どもの困難さに応じた指導をすることは、ますます難しくなっている。（協議の場でも、増加・多様化に対して人員不足により十分な支援ができないという意見も多く聞かれた。）その状況の中で、今回の実践は、全体指導で個々のニーズや実態をスクリーニングし、そうした生徒の実態を丁寧に把握した上で、個別指導につなげている。個別指導の指導内容としても、教科学習を基本として成功体験を積み重ねることを大切にしている。また「自己表現・他者受容力の育成」を目標とし、特別支援学級在籍生徒がインクルーシブな環境で人との関わりを学ぶ素地を養っていることが重要な点であると考えられる。また、教科担任がその教科の面白さを伝える全体指導の取り組みは、特別支援学級担任以外の教員も巻き込んでいるため、教員間での特別支援学級への理解を促進することが期待できる。特別支援学級在籍生徒にとっても、学びの奥深さを知ることができ、双方にとって良い機会を創出しているように思われる。

インクルーシブ教育の推進とは、ただ皆が同じ空間で過ごすことではない。特別支援学級在籍生徒が交流級で学べること、特別支援学級で学べることを指導側がしっかりと認識して示す必要がある。このような実践の積み重ねがインクルーシブ教育の土台となっていくものと考えられる。